



時に厳しく、時に優しく... 愛情あふれるゼミで、自分の力を高める

大学院社会産業理工学研究所 社会総合科学域 教授

Meredith Stephens (メリディス スティーヴンズ) 研究室

毎週プレゼン実施! キビシイと噂の研究室

メリディス・スティーヴンズ先生の研究室には、外国人留学生の姿も。「このゼミは個性的なメンバーが揃っていて、みんな、オモシロいんです」という新井希さん。話をしていると雰囲気もよく、仲



メリディス スティーヴンズ先生。

がいいのが伝わってきます。しかし! メリディス先生のゼミは、厳しいことで有名なんだとか。

「毎週、プレゼンがあるんです。課題となる文献を読んで、インプットしてからみんなの前でアウトプット(プレゼン)することは、すぐ自分の力になると思っているんですが、先生に貰った本だけじゃなくて、それに関係する文献も調べるんですけど、なかなか全部は調べきれなくて...」

『ちょっとしんどいかも』って噂には聞いてはいたんですけど、まあ、そこは頑張るしかないかと思っています。

新井さんは1年生の頃にメリディス先生の講義を聞き、応用言語学に興味をもったといいます。メリディス先生の話を通訳しな

がら今、取り組んでいる研究テーマについて話をしてくれたのは内海早瑛さん。

「日本語の『ごめんなさい』は謝る時に使いますが、『すみません』も同じように使いますよね。でも『すみません』、ありがとう』と言った場合は謝っているわけじゃない。その言葉が使われた状況や文化的要因によって生じるニュアンスの違いや意味の変化なども研究しています」。

ちょっと違った違いに気付くと オモシロさが浮かび上がる

日本語と英語のニュアンスのズレや、それぞれの単語が含む意味の違いを、どうやって見つけ出すかというところから始ま

の英語教育の前に、英語を話せる教員の数が少ないことから、学生たちの英語のスキルを活かす場として積極的に協力しているといいます。

将来、教員を目指しているという新井さんは、「好きな子は自らすすんで発表もしてくれるんですけど、英語に苦手意識持っている子は顔も楽しくなさそうですし、その子にどうやって英語を教えるのか、すごく難しく大変」と、苦戦している様子。

教育現場における英語の指導方法や英語を日本語で指導する際のちょっとしたニュアンスの違いがどこで生じるのか。文化なのか、教育方法なのか。その発端を探す研究にも取り組んでいるので、小学校はまさに実地体験の場です。

英語で考え、英語で話すためにリスニングスキルをアップせよ!

研究を深めるためにも、もっと英語能力を向上させることが必要というメリディス先生。

「日本人が英語を使う時、英語で聞く↓日本語で考える↓英語で話すというように、無意識に翻訳がかかってしまうので、英語↓英語というプロセスを組み上げるため

るのだそう。しかも「日本語の文献だったら日本語で読んで、それを英語に翻訳し、その逆も行い、『ここ、ここが違う』みたいな作業を行っています」という松下卓幹さん。

英語と日本語、双方の語学力に加え、文化や歴史など、文献を読み解くためには幅広い知識が必要ですが、煩雑な作業の中にオモシロさを感じることがあるといいます。「例えばドラマの一場面で、他愛もないセリフが人間関係や背景と絡み合って、皮肉になったり冗談になったりするのが分かったらオモシロい。そういうところに興味があります」。

メリディス先生のゼミでは、英語教育のサポートスタッフとして小学校へ行くこともあり、2020年から本格化する小学校には、CDなどの教材を使ってリスニングの能力を上げたり、実際に話をして、会話能力を上げたり:英語能力の向上が必要です。それから言語を習得するうえで大切なのは、対話する者同士、いい関係を築くこと。相手のことを理解しようとするかどうか、そういう関係を作れると、学ぶ意欲も芽生えます。

さらにちゃんとした発音を身につけることも大切。日本人の英語は、日本語の発音が残っているところがあるので、きれいな発音ができるようになる、相手が聞きやすくなるし、話す側も文の繋がりが理解できるようにになります。リスニングスキルが上がれば、息継ぎのポイントや会話のリズムも自然と身につく、リーディングのスキルも上がります。

まずはリスニングの力をつけること!これが非常に大切です!」:という先生の話(英語)を、ナビゲーターの皆さんは見事に訳してくれました。先生の熱意を受け止め、研究を通してあなたと交流を続けるみなさん。厳しい中にも愛情があふれる研究室でした。



◎ナビゲーター(写真左から)
総合科学部 社会総合科学科 3年
三宅 由香里 (みやけ ゆかり)
総合科学部 人間文化学科 4年
内海 早瑛 (うちみ さえ)
新井 希 (あらいのぞみ)
松下 卓幹 (まつした たかき)

内海さんが去年の夏、アメリカへ留学した時の様子。「将来は入国管理官や税関など、英語を活かせる仕事につきたい」という。



「先生もすごくサポートしてくれたり、先輩にも教えてもらったりしています」という三宅さん。「他のゼミの人から見て厳しいというイメージはあると思うんですけど、その分自分も高められるというか、価値のある勉強をしているゼミだなぁと思います」という新井さん。英語が不得意な取材者に代わり、ナビゲーターの皆さんが通訳のように先生との間を取り持ってくれました!ありがとうございました。